

篠笛譜の改良からみた六代目福原百之助の功績

孫 瀟夢

六代目福原百之助(1922～2010、以下「六代目」とする)は福原流鳴物六代目宗家、福原流百之助派四代目家元であり、幼い頃に両親から日本伝統音楽(歌舞伎囃子を中心に)の薫陶を受けて、戦後の邦楽界の再建に携わって、特に横笛の発展に貢献した人物である。

明治時代 20 年代、大阪で歌舞伎が盛んになって、歌舞伎囃子においては笛の役割が重視されてきた。笛の重要性が大きくなる事に乗って、小川流(上方歌舞伎)の小川源次郎が制作した小川譜と、民謡尺八の奏者鶯聲散士が制作した鶯聲譜と言う二つの篠笛の教本が大阪で出版された。

戦前と戦中の時代に、歌舞伎囃子の奏者が自分流派の流派内譜もしくは、公開の教本を作ることが多くなった。笛だけではなく、鳴り物も含めている教本が多くなった。望月太意之助の「長唄囃子教本」、藤舎流の内伝の譜面、五代目福原百之助が出版した篠笛教本等がある。これらの楽譜は、簡単な数字と漢字の使用を中心として、昭和7年に発表された五代目譜は初めて算数字と漢数字で高音域と低音域を区別した。

戦後、日本の伝統音楽界は西洋音楽から深い影響を受けた。当時の政府と社会は創新的な伝統音楽を期待し、資金援助や、伝統音楽のコンクール開催などが増えてきた。この時代に、笛専攻の演奏者が出てきた。笛の普及と後進育成のために、六代目は五代目譜の上に、符号を修正して六代目譜(現行の篠笛譜)を完成させた。六代目譜は音程符号においては高音域と低音域は算数字と漢数字で区別して、リズムにおいては音符延長、四分音符、八分音符にあたる符号を採用している。

今まで出版された譜面の比較分析によって、六代目譜が他の譜面より横笛の旋律を表現しやすく、横笛の演奏の特徴に即応した譜面といえることが分かった。六代目譜が制作されてから歌舞伎囃子の笛方の間に普及しており、歌舞伎囃子の能管の唱歌譜と祭囃子の唱歌譜に影響を及ぼしているだけでなく、他の民間音楽の曲集にも用いられている。六代目譜の進歩性の大きさから、現代の篠笛に対する六代目の功績が明らかとなった。